

無能な変身魔術師の真  
髓　～武器と道具が女  
の子になると、最強に  
なれるんですね～

室星奏

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

俺はある日を境に、地獄へと堕ちた。最難関ダンジョンと呼ばれる逆塔の下層地帯へと、落下してしまったのだ。

俺は「変身魔術師」という天職を持ち、変身魔術を得意とする人間だ。最も、それは無能力だったわけなのだが。

例えば石をポーションに変身させたとしても、元は石である為ポーションとして使う事ができなければ、弓に変身させたとしても、石である為動かす事が出来ずそのまま不発に終わってしまう。

そりゃ無能ですよね。

下層に落ちてから数日、俺は宝箱から魔杖を一つ拾った。しかも背後には、A級クラスモンスターである王虎が――。

死を覚悟したとき、なんと俺の目の前に可愛らしい女の子が現れた。しかも、俺の言葉に反応して強い魔術を放つ事が出来るとか言う優秀な女の子だ。

そしてこれはすぐにわかった事なのだが。

どうやらこの子、拾った魔杖が女の子に変身した姿らしい。

# 目次

0 1	下層に落下してしまったようだ	
1		
0 2	魔杖を拾いました	8
0 3	王虎・キングタイガー戦	14
0 4	命を与える	20
0 5	ビヤクヤ	27
0 6	魔剣王ソルス・前編	34
0 7	魔剣王ソルス・中編	40

## 01 下層に落下してしまったようだ

逆塔<sup>ロウ・タワー</sup>地下第298層。地上の光は一向に見えてこない。

俺の名前はクレイ・フォカスト。この世界で言う、「変身魔術師」と呼ばれる天職にいた物だ。といつても、この世界ではどうやら無能として言われているようだけれど（俺もそう思ってる）。

というか寧ろ、無能じゃなかったら今頃俺はこんなところになんている筈もなく、地上で仲間に囲まれて楽しい冒険者ライフを過ごしていたことだろう。

しかし今、そんな状況とは180度かけ離れた状況に置かれている。何があったのか説明すると長くなるが、端的に言うとなんか俺は今、数日前に仲間たちから見捨てられ、ここ最難関ダンジョンとされる逆塔<sup>ロウ・タワー</sup>の最下層で過ごす事となった。まあ過ぐすと云つても、あいつらにとつては廃棄処分みたいな感じと捉えているのだろう。実際にそれは間違ひではなく、俺は何度もここで死にかけてた。

「……」

『グルルル……』

今もなお、俺は死ぬか生きるかの瀬戸際に追い込まれている。目の前にいるのはA級

クラスモンスター的一种、王<sup>キング</sup>虎<sup>タイガー</sup>だ。その強靱な爪は触れただけで無防備な人間の身体を引き裂き、激しく吠えるだけで大木一本を軽く吹き飛ばすぐらいの力を備えている。変身魔術しか使用することのできない攻撃力皆無の俺ならば一瞬で死んでしまうレベルの相手だろう。

だが、王虎は私の臭いを嗅いでは困惑している。まるで、自分が人間だと断定できていないかのように首をかしげている。

そりやそうだ。今俺は変身魔術によって石に変身している。これによって王虎の視覚を欺きながら耐え忍んでいる。最も、石に変身したと言ってもそれは外見だけであり、内面は俺そのものでしかない。石と同じ硬度になっているとか、石と同じ重さになっているとか、そういった便利な能力は持ち合わせていない。あくまで外見だけなのである。

しかも変身させることができるのは、自分と自分の所有物のみ。他人の所有物や敵等は変身させることができないのである。

そりや無能って言われるよな。

そもそも、どうしてこんな状況に俺が陥ったのか、それはいたって単純なお話である。さつきもいったが、俺は一緒に冒険を繰り広げていた仲間たちに数日前見捨てられて

いる。理由は当然、俺が冒険においては役立たずのクソ野郎だったからに他ならない。

パーティーの前衛役として、敵を最前線で斬り倒す【剣士】のパルド、パルドが始末しきれなかったり、背後から迫ろうとしているような敵を遠距離から殺しにかかる【弓兵】のガツテム、そして多彩なる回復魔法を使って、味方を癒す役目を持つ【治癒師】のアリア、そして【変身魔術師】の俺。といった4人パーティーで色んな地を冒険していたのである。うん、こうしてみればやっぱり俺は浮いているな。

そんなある日、まさに今俺がいる逆塔の攻略をしている途中……確か第80層あたりだっただろうか、そこで俺達は野宿をすることになった。俺は、それが仲間たちの畏だという事も知らずに、気づいたら深い眠りへと堕ちてしまっていた。

目覚めると、そこには既に俺以外の誰もいなかった。困惑した俺は、周囲を見渡してはみたが、人影一つも見つける事が出来なかった。

途方に暮れてしまったが、ふと俺は気づく。そういや荷物の中に『抜け出しの珠』と呼ばれるアイテムがあった事を。これはその名の通り、使用すればダンジョンから一瞬で抜け出す事の出来るという便利な代物だ。

死にたくなかった俺は、さっそく元の位置に戻って鞆を漁ったが、珠どころか衣服以外の荷物が全て鞆の中から消え去ってしまった。いったい何故——と、そんな時、鞆の底に見慣れない紙切れがあったのを見つけ、急いで取り出す。

そこには、信じられない言葉が書いてあった。

『君が目覚めている頃には既に、俺達はダンジョンを脱出しているだろう。散々俺達の足手まといとなった事を、地獄で後悔するといい——パルド』

それで俺はすべてを悟った。このダンジョンに来たのは攻略するためではない。お荷物となった俺という存在を消す為に、一番手っ取り早い方法を取ったのだろう。口でそのまま伝えてしまえば、俺は絶対に抵抗しただろうから。

全く、賢いパーティーに就いてしまったのも、間違いだったようだ。

その後は奴らの思惑通り、俺目掛けて幾多の魔物たちが襲い掛かってきた。その都度俺は石に変身したり、葉っぱに変身したりしてやり過ごしてきた。正直運が良かったと言っても過言ではない。変身過程がバレてしまつては、完全に意味をなさなくなつてしまふだろうからだ。

だがその運も、ある日尽きてしまった。モンスターの気配を感じ、石に変身したのだが、気配を消す事が出来るスキルを持ったモンスターに観られてしまったのだ。そう、想像していた最悪の事態が本当に起こってしまったのだ。

あの時の絶望は今でも覚えている。というか、トラウマとして根強く残っている。その時の俺に残された選択肢は、もう死しか残っていなかったからだ。

『死にたくない』という感情だけに身を任せ、とにかく逃げて逃げて逃げ回ったが、最



悪な事に行き止まりまで追い込まれていたようだった。奴らは意外と人間みたく賢いのだ。

ジリジリと間合いを詰める敵から眼を逸らし、背後に一瞬目をやる。そこには落下防止の為なのか、柵が建てられた大穴があった。

その時の俺にはどつちにしろ、死しか残っていなかった。ならいつそ、モンスターに喰い殺されるくらいなら、落下死して死ぬ方がよっぽどマシだと俺は判断した。

——意を決し、俺は落下した。

何度も、色んな階層をこの眼で見してきた。第90層、100層、150層——こんなつまらない光景が最後になるんだなあと悲しい気持ちになりながら、死を覚悟し目を閉じた。

と、思っていたのだが、幸いな事に俺は生きていたようだった。

落下した場所は第298層、逆塔の最下層だ。そこに存在していた大きな湖の中へと落下し、奇跡的に助かったみたいだった。

そこは古い遺跡のような景観をしていた場所あり、当然のように人気はいなかった。そりやそうだ。

しかし魔物は当然のように存在し、しかもダンジョンには絶対にはいないであろうA級モンスターが至る所に存在する。前居た層よりもさらに地獄のような場所に来てし

まったようだった。

それで今に至る、というわけである。ここで過ごし始めてから早数日。さすがに空腹の面でも、体力の面でも限界である。

『グルル……』

「……いつ……たか？」

王虎がズシズシとその場から立ち去ったのを見計らい、変身を解き柱の影に隠れる。さて、これからどうしようか。

さすがにここで永遠に暮らす、というのは心身共にもつわけがない。何時か絶対に発狂する。

……となると、俺に残された選択肢は一つか。

頑張つて地上を目指す。モンスターに襲われそうになったら、逃げて隙を見つけて何かに変身する。最初は失敗したが、数日も繰り返せば、さすがにコツもちよつとだが掴めてきていた。

ヨシ！ と意を決したその時、俺は目の前に一本道があるのを見つける。さつきは石になつていて気付かなかつた様だ。

冒険者という職業柄、こういう一本道の先には宝箱とかよく置いてあつたりするものである。宝箱の中には携帯食料も入ってる可能性があるため、さすがに確認しないとい

うのはもったいないだろう。

隙を伺い、一本道を走り去る。

そこには案の定、宝箱が置いてあった。しかもレア度の高い赤色。さすが最下層だ。

「……携帯食料、携帯食料ッ！」

祈りに祈りながら箱を開く。——そこにあつたのは、なんと、なな、なんと！

「……杖かよ」

綺麗な装飾がされ、魔力が少し溢れた美しい形状の魔杖。見た目から推測するに【黒魔術師】専用といった所か。一応【変身魔術師】も【黒魔術師】系統の天職である為、扱えない事はないのだが、変身魔術しか使えない俺にとつては宝の持ち腐れである。

「武器より食糧くれよ、食料~~~~ツツ!!!!」

と嘆き叫ぶと背後から聞きたくもないような音が聞こえる。

ズシ……ズシ……。

それは、明らかに獣の足音だった。

## 02 魔杖を拾いました

ズシ……ズシ……。

聞きたくもない音に怯えながら背後を振り向くと、そこには先ほどの王虎が禍々しい覇氣オーラを放ちながら、こちらへとゆっくり歩いてくる姿があった。

先ほどの変身解除を見られていたか？ いや、立ち去ったのは完全に確認した。じゃあ、一体何故？

……さつき叫んだ時の声か!? どんだけ耳がいいんだこのクソ獣!!

『グルルラアア!!』

(変身が間に合わない。見られてちやさすがに意味がない……)

何か、何か手段はないだろうか。

俺の手元には、衣服と鞆、そして先ほど手に入れた魔杖のみ。これだけの手持ちで一体何が出来るというのだろうか？

考えている間にも、俺と奴の距離は段々と狭くなってきた。ああ、奴は今にも襲い掛かってきそうだった。

『グルルア!!』

「ど、どどど、どう、どうすれば!？」

焦った俺は、とりあえず目の前の杖をブンブンと振った。

魔法出る、魔法出せ! 何度願っても、その思いは通じません。なぜなら俺は変身魔術しか使う事が出来ないのだから。

変身魔術……じゃあ変身魔術を使えばいいじゃないか。

「えーと、石! 葉っぱ! 砲弾! と言うか変身させても意味ないじゃないか!」

外見だけの変身に何の意味があるのだろうか。姿と動きは外見そのものにできるのだが、能力等の内面は変身前と同じなのだ。全く持つて意味がない。

『グルル……』

「あー! えっと! イカ! タコ! クラゲ!」

何故魚を選んだ。

『グルルラア!!』

しびれを切らし、ついに王虎がこちら目掛けて爪を振り下ろした。

ハッとそれに気づき、前方に勢いよく飛び込む形でそれを避ける。まさに間一髪、ギリギリのナイス対応であった。

……状況は一向に変わらないのだが。

「あーもう! どうして俺がこんな目に合うんだよ!」

俺は楽しく生きていただけなのに。色んな冒険して、皆と笑って、泣いて——。そんな理想な生活を臨んでいただけだというのに。

結局は力な世の中だ。力がない物には、そんな楽園じみた生活を送る権利なんて一切存在しないのだ。

……全く、ふざけた世の中だ。

『グルル……』

「……っ」

涙で視界が歪む。もう王虎を視認することすらできなくなっていた。いや、俺が視認するのを拒んでいるだけなのかもしれない。現実逃避という奴だ。

実際に、俺の立場になってしまったら、どんな人物であれ焦るだろう。相当な力を持つている者か、優秀な仲間がいる者でなければ。

『グルルアア！』

「……っ！ 嫌だ死にたくない！ 神様、神様ッ！ 誰か、誰でもいい、誰か……助けに来てよっ！ 俺を助ける、仲間になってくれよ——!!!」

必死に叫ぶ。手に持った魔杖を握りしめて、とにかく軌跡が起こるように願った。

——その時だった。

突如眩い光が周囲を照らす。涙によって歪んだ視界が真っ白に染まる。何が起こつ

た？ 死んだのか？ 死んで天界に運ばれたのか？ なんて一瞬なんだ、輸送サービス  
凄いな。

と思っただが、どうやらそうではなかった。

光が晴れると、俺の目の前に一つの人影が現れた。可愛らしい女の子だったし、しかも俺好みの容姿だった。裸だったため、少し視線に困ったけれど。

これはあれか？ 死ぬ間際の幻覚か？ 女の子の膝元で安らかな死を遂げる事が出来るのか？

……そういえば、手元にあつた魔杖がいつの間にか無くなっていた。アレが唯一の助け綱だったのに、何で急に消えるんだよ。アレも幻覚だったのか？

『グルル……』

王虎の威嚇声が強くなる。——あれ？ こんな泣き声、俺聞いたことないんだけど。というか威嚇声？ 何に威嚇してるんだ？ 俺にか？ さっきまで食料だつていう眼と泣き声をしていたじゃないか。どうした急に。

……もしかして、目の前の女の子か？

「……」

『グルラア!!』

「あ、危ない、何とかしないと——ッ！」

俺がそういった刹那、目の前の女の子が片手をブンツと王虎目掛けて向ける。その動作はまるで、先ほどの俺の声に反応したかのように綺麗だった。

そんな事して一体何になるのか？

「……デアスタ炎弾」

小さく、そしてか細い声でそう口にする。彼女の手には、その言葉に反応したかのよう  
に朱色の魔法陣が展開され、そこから王虎目掛けて炎が数弾放たれる。

俺は息を飲んだ。それは明らかに魔法だった。夢かと思つて、頬をつねつてみたが、  
目が覚める事はなかった。痛覚もあつたという事は、今見ている光景は現実なのだろ  
う。

『グルルアツ——！……グルル……』

「……君は……」

ようやく視界がはつきりとしてきたので、彼女の容姿を改めてみる。

まるで聖樹の木のようにきれいな茶色を帯びた髪に、紺碧色の綺麗な魔法石を拵えた  
ピアス。

……ん？ あの魔法石、最近見た気がする。しかも、ほんの数分前に。

綺麗だなあという感想と共に、どこかで見たような気がする疑問に襲われ、そのピア  
スをマジマジと見つめた結果、ようやく気付く事が出来た。



そういえば、先ほどの魔杖にも同じような魔法石が装飾として使われていたという事に。……ということとは、まさか。

「……へ、え？ ……ま、まさか……」

試しに俺は、変身解除と眩き指を鳴らす。

女の子の周囲にポフンツと煙が現れ、カランツと地面に魔杖が落下した。

それは紛れもなく、俺が先ほど手に入れた魔杖だった。

「……嘘、だろ？」

そう、あの少女は――。

魔杖が、人間に変身した姿であった。

## 03 王虎・キングタイガー戦

『グルルル……』

「——ッ、あいつ、アレ食らってまだ生きてんのか？」

毛皮が一部焼き払われたにも関わらず、王虎はその巨軀をゆっくり起き上がらせ、こちら目掛けて再度威嚇の声を上げる。

さっきの女の子が変身した魔杖だという事を知っているのか、先ほど落下した魔杖を睨みつけ、今にも踏みつぶさんと前足を地面にこすりつけている。

この状況を打開する——それにはやはり、先ほどの魔杖の力が必要なようだ。しかし、先ほど手に入れたのもあつてこの杖がどうい物なのかも理解していない。

『グルルウア——!!』

「つと——!」

杖を手に取り、飛びかかってきたタイミングでその巨軀の下を抜け出し退避する。その隙を見計らい、魔杖の詳細を表示する。

★★★★★★★★★★★★★★★★★★

武器種：杖（魔術師専用）

名称『天地開闢の魔杖』

固有スキル：【森羅万象・術】

【効果】

一部天職を除き、使用者は全ての魔術が使用可能になる。

スキル：【魔力循環】

【効果】

使用魔力が半減する

★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★

確かに一目見た時から魔力は微かに感じてはいたものの、まさか全ての魔術が使用可能になる杖とは想像もしていなかった。これひよつとしなくても、この世にいる全ての魔術師が欲しがらるだろう。何せ、これを持つだけで敵無しになるような物なのだから。

まあ当然のように、俺が持ったとしてもそんな効果は発揮されないみたいだが。この一部天職には、変身魔術師も入っているという事だろう。じれったい。

宝箱から手に入れたという事は、つまりこの魔杖の現在所有者は俺という事になる。つまり、変身魔術行使の適応内というわけだ。だから俺の呼び声にも答えてくれたのだろう。

へっ、勝機が見えた。

「変身魔術——……なんていえばいいんだろ。ん〜……とりあえず、女の子!」

先ほどは無意識だったが、原理はいつもの変身魔術と同じ道理な筈だ。

変身させたい物に向けて魔力を送り込み、何に変身するかを脳内で念じ叫ぶ。変身魔術師にとって一番大切なのは、何に変身するかイメージ力だ。それがどういう構造をしているのか、どういう動きをするのか、それら全てを脳内で想起して、その情報を変身させたい物に魔力を介して送り込むのだ。

そうすればあら不思議。

ポフンツ。

「…………お、おお」

「…………」

『グルルルル…………』

先ほど現れた女の子が再び、俺の目の前に姿を現した。しかし元は杖でしかない為、歩く事もできなければ喋る事も出来ないみたいだ。まあさすがにそこまで便利じゃないわな。無能ですから。

だけど、この子を杖として扱えば問題ない。

物に変身させるのと生物に変身させるのとで、扱い方が変わってくるのは変身魔術師の中では常識中の常識だ。

物に変身させた場合は何も考えなくていいが、生物に変身させた場合に至ってはその限りではない。生物に変身させた場合は一部行動を除けば、こちらが魔力を送って命令することによって、変身する前の物の力を使用することができる。

今回の場合だったら、魔杖の固有スキルやスキルを使用できるというわけだ。先ほどの攻撃もそういう原理なのだろう。

「……よくわかんないから、とにかく凄いでやっちまえー！」

『グルルルアー……！』

王虎が激しい咆哮を上げ、無力の私とあくまで元は杖でしかない彼女はそれで軽く吹き飛ばされてしまった。壁に背中を強く打ち付ける。かなり痛い。

しかし、彼女は何事も無かったかのように目を見開き、王虎に向けて手を広げる。

「――ザボルグ・ガイア獄炎」

「……へ？」

手から何重にも重なった朱色の魔法陣が展開され、陣に描かれた魔術文字が次第に炎を纏っていく。どうして？ 何で魔法を展開しただけで地鳴りが起きるわけ？

炎を完全に纏った魔法陣はひとりで回転を開始し、壁や床を裂きながら王虎目掛けて勢いよく放たれる。

『グアー！』

でかい図体をしているクセして、運動神経はかなり良く地面を勢いよく蹴り上げ、放たれる魔法陣を回避する。

しかし、魔杖が一枚上手であった。飛びあがった場所目掛けて次なる魔法を叩きこむ。

「——デア・ギルド神雷」

今度は黄金色に輝く魔法陣が現れ、中心部から轟音を荒げ、大きな雷が放たれる。飛びあがって、身体を自由に動けない王虎に回避手段はない。

さらには、先ほど放った魔法陣もスカした瞬間に急転回して再び王虎目掛けて動き出す。ホーミング付きかよ、本当に魔法か？ アレ。

『グガアアアアアアアア……アア……』

「どあああ!？」

爆風と共に、上空の王虎が二つの上位魔法によつてはじけ飛ぶ。焼き焦がれたその巨軀は死体と化して俺達の目の前に落下し、瘴気と共に魔法石へと変貌する。さすがA級クラスのモンスターだ、回収できる魔法石の量の尋常じゃない。

俺は、なんとか危機を回避することができたのだ。

「……にしても……なんだこれ、すげえ」

俺の身体にもたれかかる魔杖の女の子に視線を移し、感嘆の声を上げる。いや、上げ

ざるを得ないだろう。

……もしかしたら、もしかしなくても、ここで色んな武器や道具を回収して、女の子に変身させれば、この逆塔を攻略することができるのではないだろうか？

そうと決まれば、さっそく上を目指すとしよう。さっきも言ったが、こんな暗い所に長居したくないからな。

よつと立ち上がり、俺は歩きだす。

……あ、そうか。杖だから歩けないのか。歩き出した瞬間、支えを失った魔杖の女の子は地面に倒れ込んでしまった。

仕方ない、何か手段を考え付くまで、お姫様だつこでもして運ぶことにしよう。女の子に変身した杖ならば、こういう扱いの方が適任だろう。

——あれ、これってもしかして、俺勝ち組になったのでは？

そう考えれば、見捨ててくれたあのクソ野郎どもには感謝しなければならないな。

とりあえず、まずは服を着せる事にしよう。眼のやり場に困って今後に支障が出てしまう。しばらくは、俺の服を貸してあげる事にしよう。

## 04 命を与える

(軽ツ……)

女の子となった魔杖をお姫様だっこで抱えながら、入り組んだ通路を慎重に駆け抜ける。ここ、逆塔の構造は蟻の巣のようにグチャグチャであり、正に迷宮と言つて差し支えないような物であった。

モンスターの出待ちとかも日常茶判事と言えば、その構造の複雑さがよくわかるだろう。

「……《変身：コウモリ》」

偵察用アイテムの一つ、『千里眼の眼球』を使用して注意深く進む。

これは魔力で操作できる代物であり、眼球が見ている視界を所有者と共有できるという代物である。しかも魔力で浮遊させることができる為、空中の偵察も何のそのという冒険者にとって必需品ともいふべき物だ（まあ先ほど宝箱から見つける事が出来なかつたら、詰みではあつたのだが）。

小さい為一部モンスターには気づかれにくいだが、ここ逆塔のモンスター相手だとそうもいかない。見慣れない眼球なんて見たらすぐに破壊してくる程賢いのだ。



しかし、さすがにこの辺りならいくらでも生息しているコウモリ相手ならば警戒は薄い。当然元は『千里眼の眼球』である為、視覚共有能力はそのまま使用することができ、元から浮遊能力があるためコウモリへの擬態も完璧だ。

ありがとう宝箱、感謝するよ宝箱。

「……右の安全地帯に宝箱……青色だからレア度はそこまで。換金アイテムかな？」  
今いる通路を右に回って直進した先の行き止まりに俺ら冒険者が安全地帯と呼称している青白い魔法陣が展開されているのを確認する。

それは神代の人々が未来を護るために、世界各地に生成したとされている護身の魔法陣である。中に入れば、魔物からは視認されなくなり、気配もシャットアウトされる。本当に先人様には頭が上がらないよ。

ちなみにこの魔法陣、現在再現しようと帝国の魔術協会が躍起になっているようだが、見た目以上に複雑な構造をしているらしく、中々進展はしていないらしい。まあ、神代の魔法陣らしいし、簡単に解析されるわけないか。

「……《変身解除》からの、《変身：王<sup>キング</sup>虎<sup>タイガー</sup>》」

魔杖を元に戻して背中に担ぎ、俺達を襲ってきた王虎の巨軀に変身する。

これほどの巨軀には変身したことなかったものの、この辺りになら数体生息するため、地上を歩く生物の擬態としては非常に有用であるのは確かであった。

(クソ……消費魔力が激しいか?)

だが、さすがにリスクが大きすぎたようだ。身体から魔力が急激に吸い上げられているのが分かる。長くは持たないだろう。

可能な限り全力を出し道を駆け抜ける。途中、他の王虎や魔宮蟲ヘブルコブラに遭遇したが、少し怪訝に視線を送るだけで、追いかけるようなことはしなかった。セーフセーフ、こういう時だけは変身魔術師だったことに感謝しかない。

数分後、ようやく安全地帯にたどり着き、変身を解除する。おっと、魔杖は女の子に戻しとかないとな。いや、こつちが本体ではないのだけれど。

「……ふう。暫く動けないわ」

女の子にした瞬間、魔杖は俺の背中から滑り落ち、魔法陣の地面に突っ伏す。女の子の身体にはさすがに、落下防止のベルトは耐えきれなかったようだ。

……意識をもって、歩いてくれたらそれに越した事は無いのだけれど。

「……今、何層だ。ああクソ、階層チェック用の道具も持ってかれてるよ」

鬼畜すぎないだろうか? いやまあ、殺すつもりで置いてったんだから、そりやそうか。

そんな事はさておき、俺は改めて宝箱の方に目をやる。青色の宝箱、レア度は魔杖が入っていた宝箱より劣り、主に便利アイテムのほかにレアな換金アイテムが入っていた

りする。

金にがめつい俺はお宝に関してはかなり知識を持っている、冒険者になった理由の一つがお宝さがしという楽しい事ができるから、だったから。

ここは最難関ダンジョン、逆塔だ。もし換金アイテムが入っていたら、それはもしかしたら、伝説上へのみ語られる凄い物なんじゃないだろうか。

ゴクリ。

期待と好奇心で身体が押しつぶされる。ああ、俺が冒険者になつてはじめて宝箱に遭遇したときも、こんな感じで高揚していたのを想起させる。その蓋を開けるまで何が入ってるかわからないというドキドキ感、とても素晴らしい物である。

まあでも青宝箱だから、換金アイテムには特に期待できないだろう。便利アイテムが入ってたらいいなと思いつつ、俺はゆっくりとその蓋を開いた。

★★★★★★★★★★★★★★

《宝箱》 Rank:Blue

・アイテム：治癒薬・特 ×10

・アイテム：不思議な地図・特

・換金：ホムンクルスの魂玉こんきょく

★★★★★★★★★★★★★★

特上の刻印が刻まれた最上級のアイテムが2種類と換金アイテムが一つであった。便利アイテムの方はよくある内容だが、ここで地図が入るのは嬉しい。不思議な地図というのは、ダンジョンで今自分が何階層にいるのかが分かり、一度通った通路や現在位置を確認できる代物なのだが、特上の刻印が刻まれたこれは通っていない通路でも微妙にわかるように進化している。これが下層の報酬か、未恐ろしくなってくるな。

さて、それより問題はこれだ、『ホムンクルスの魂玉』。これまでいろんな換金アイテムを見てきたが、このような名称をしたアイテムは見た事も無い。置いてない物はない、とまで言われている帝国の骨董屋にも置いていなかったという事は、俺が第一発見者といっても過言ではないのだろう。

「……幾らぐらいするんだよな……つても、ここから無事出る事が出来なきや宝の持ち腐れか」

冷静に考えれば、換金アイテムも骨董屋か質屋に持っていかなければゴミと化すだけであった。ふう、とため息をつき、一先ずアイテム説明を確認する。

★★★★★★★★★★★★★★★★★★

換金アイテム『ホムンクルスの魂玉』 Rank:A

説明：神話の人造人間『ホムンクルス』の魂が込められているとされている宝玉。

意思なき存在に、意思を与える事が出来るとされる。

固有スキル：【心意・魂】

【効果】

アイテムにスキル【生命活動】を付与することができる。

★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★

何やらとんでもない事が書かれている気がするな。スキル【生命活動】って何よ。まさに説明文通りの内容ではあるのだが、さすがにこのスキルは想像していなかった。

換金アイテムに固有スキルが付与される事は別に珍しい事ではないのだが、大抵付けられるスキルというのは、生命力の増加や魔力の増加等、目ぼしい物ではないのが関の山である。

そんな中で、このスキル。どんな換金アイテムのスキルよりも一線を画しているのではないだろうか。

といってもこのスキル、使うタイミングが限られるだろう。使用回数が書いてないと  
いう事は、何度でも使用できる便利アイテムといった所だろうか。最も、アイテムに生命活動を付与したところで、冒険者にとっては何の得も無いだろう。

しかし、しかしである。俺の場合はどうだ？ ふと、横で横たわる魔杖の女の子に視線を送る。

もし、魔杖にこのスキルを付与することが出来たなら。歩く事も、喋る事も可能にな

り、共に冒険することができないのではないだろうか。

「そうと決まれば——ッ！」

俺はグイッと身体を女の子に移し、魂玉に魔力を送ってスキルを使用する。魂玉がバチバチと青色の電気を帯びながら、光り輝いていく。それと共鳴するかのように、ドクン、ドクン、とどこかから心臓の鼓動音が響く。

「……あ」

「おっ！」

女の子の手がビクツと動く。その刹那、魂玉が発光をやめ、元の状態へと戻る。

その身体はおぼつかない様子でゆっくりと起き上がり、こちらに朧げな視線を送る。しかし、その時の表情は少し笑っているように見えた。

「……成功した、のか？」

俺が困惑すると、少女はゆっくりと口を開いてくれた。

——マスター？ と。

## 05 ビャクヤ

「マスター？」

「へ？」

突拍子に出たそのセリフに、俺はつい面をくらってしまった。しかし、その女の子は疑問に思っていないのか、表情を変えずにこちらをじっと見つめてきた。

「あの、マスターってのは？」

「……私は貴方の所有物ですから……」

なんか一々発言がたどたどしい。その様は生まれたての小鹿のようで、微笑ましいものはあったが、今後の冒険に支障が出てしまうかもしれない。

スキル【生命活動】自体が初めて見るスキルの為、どう扱えばいいのか理解が出来ないのも問題か。いや、武器の詳細を感じる感じで確認すれば行けるのか？

★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★

武器種：杖（魔術師専用）

名称『天地開闢の魔杖』

固有スキル：【森羅万象・術】

## 【効果】

一部天職を除き、使用者は全ての魔術が使用可能になる。

スキル：【魔力循環】

## 【効果】

使用魔力が半減する

スキル：【生命活動】

## 【効果】

会話、自立行動、意思疎通等の生命的活動が可能となる。

違和感なく活動する為には、慣れる為の時間を要する。

★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★

ホームクルスの魂玉と呼ばれるだけの事はあるか。そう思えば、最初は無機質っぽいのも無理はないのかもしれない。

手を取って、ゆっくりと立ち上がらせる。歩けるかどうか質問した所、方向変えてゆっくりと歩き始めた。杖の状態だとこれどうなっているのだろうか、気になって解除してみた所、普通に浮遊しながら動いていたのを確認した。

「所有者だと思っただが、<sup>オーナー</sup><sub>マスター</sub>主の方なんだな……」

「武器によって様々です。私は後者が呼びやすいです」



「様々って、普段から呼んでるわけじゃあるまいし」

「杖はマスターの命令を受け、魔力を受け取ります。その際、返答は常に怠らず行つていきますが」

杖に備わった機能の一つなのだろうか？ 思えば、仲間のアリアが杖を振るつたときに、杖が青白く輝く時があつたが、アレが彼女の言う返答なのだろう。その都度に『了解、マスター』って言ってるのだとしたら、凄く可愛いな。

まあどつちで呼んでもらつても俺は特に気にしないから、別に構わないんだけどね。だけどここの子に關しては、ずっと魔杖の女の子って呼ぶのもどうかと思うし、何か名前をつけてあげなければならぬ。

これは俺のネーミングセンスが試されているというわけだな？ 前もって言つておくが、俺のセンスは壊滅的なのである。

裸だった彼女に今着せてる俺の私服だつて、茶色で統一された地味すぎる衣服だ。髪も茶色な分、全然似合っていない。

どこかに防具とか落ちてればいいのだけど、こればかりは運でしかない為地道に宝箱を開けていくしかない。魔術師用のローブくらい、どこかですぐ見つかるだろう。

「……名前、名前……」

「名前？」

「必要だろ、ずっと魔杖の女の子ー! とか、魔杖ー! とかって呼ぶわけにはいかないだろ?」

「私は構いませんが」

「俺が嫌なの! んー……確か天地開闢の魔杖って名前だったから……もじりにくいな、これ」

モンスターの名前ならともかく、武器の名前をどうやってもじるって言うんだ? センスない俺にとっては更なる地獄でしかないのだが。

「天地開闢、開闢、開、闢……ん、よしっ! 開闢の闢をとって、ビヤクヤでどうだ?」  
無理やりすぎる。もうすこしセンスが良ければ、こんな事にはならなかったのだが。悔しいが、前のパーティにいたアリアのセンスの良さが羨ましく感じてしまう。衣服のセンスが良すぎた為に、色んな冒険者新聞の被写体として呼ばれていたっけか。

「私はどう呼ばれても大丈夫です」  
「あ、そう」

嫌なら嫌と言ってくれよ? と思ったが、無機質状態の彼女に何を言っても無駄だろうな。今後までも意思疎通できるようになった場合に、改めて聞く事にしよう。

その頃になったら、少しは喜怒哀楽も表に出てくるだろうし、ちゃんと自分の思いも伝えられるようになるだろう。

「じゃあ、今日からお前はビャクヤだ、よろしくなっ」

「はい、マスター」

マスターって呼ばれるたびに虫図が走る。ちゃんと名前前で呼んでくれる日が来てくれることを願うしかないな、こればかりは。

\*\*\*

「――絶対零度」  
トカルト・コルキス

ビャクヤの活躍は非常に素晴らしい物であった。大体の敵は、彼女の魔術によって簡単に吹き飛ばされてしまった。そのおかげで安心して、前に進む事が出来るようになった。

だが問題は俺の魔力保有量か。女の子に変身したとて、彼女の放つ魔術に使われる魔力は、俺の魔力によって賄われている。変身魔術に関しては、先ほどの王虎みたいな巨躯にならなければ、そんなに魔力は使わない。パーティーにいた頃も、そんなに魔力を使わず生きてきた為、魔力保有量に関しては宝の持ち腐れ以上と言っても過言ではない程有している。

といっても、俺の魔力は最下層に落下した際の衝撃緩和に魔力を放出したのに加え、安全地帯に移動する際に王虎へ変身するなど少し無茶をした為に、かなり減少してしまった。彼女の使用する魔術はどれも上位の物で、魔力の消費もかなり激しい。彼女の

持つスキル〔魔力循環〕が無ければ、今頃魔力枯渇で倒れていたことだろう。

どこかで、休むか。それとも、魔力供給に役立つアイテムか何かを見つかるかしないと、今後が不安だな。

「随分と進んできたな。えーっと、今何階層だ」

鞆から不思議な地図・特を取り出し、階層をチエックする。

★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★

ダンジョン名称：逆塔

現在位置：第251層

★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★

落下地点が298層だったから、既に47層も上がってきたことになる。もうすぐ250層、区切りとしてはちょうどいい。

それと同時に嫌な予感も感じていた。ダンジョン内で区切りのいい階層には、大抵フロアボスと呼ばれる存在が待ち構えている事が多い。しかも最悪な事に、俺らがいるのは最下層近くの階層である。そこにいるフロアボスとなったらば、どんなモンスターが待ち受けてるか分かった物じゃない。

ビャクヤだけで行けるか？ 少し不安かもしれないが、最悪もうこのこと以降のフロアには宝箱が存在しない。思った以上に目ぼしい物がなかったのが残念だが仕方がない。

「……マスター？」

変わりない表情で、俺の顔色を窺ってくる。主思いの良い子だな、最初の仲間が彼女で本当に良かったかもしれない。もし狂戦士の如くはっちゃけた子だったら、体力面でも精神面でも相当疲弊していたかもしれない。まあ、まだ無機質の彼女だからこそなのかもしれないが。成長したら、一体どうなってしまふのだろうか。

せめて原型は留めていてほしい。

「何でもない。先へ進もう」

「? はい」

こうなったら腹をくぐるしかない。俺たちは視界に映る250層へ続く階段へとゆっくり足を進める。

それに相半するかのようには、上の階からズン、ズン、と何かが地団太を踏む音が響いた――。

## 06 魔劍王ソルス・前編

第250層、段差が上がったその先には大きな鉄扉があった。不自然なのは開ける為の取っ手は無く、大きな壁の如くそこに聳え立つだけであった。

まあ十中八九、下から上がってくるのが正規の攻略方法じゃないからに違いない。ダンジョンが生成されたときも、そんな事想定していなかっただろう。されていたら逆に困る。

「良いか？ この先は危険が待ってる。気をつけろよ？」

「？ 私はマスターの所有物です。気を付ける必要は何も——」

ああ、無感情な奴っていうのは本当に面倒くさい。

「何も、じゃねえよ。今はただの武器じゃねえ、自我を、命を持つてんだろ、その身体には——」

「……命、でもこれはス——」

「スキルなんていったらぶっ飛ばすぞ。まあ、スキルのおかげでもあるけどさ。でも、そうだとしたら、大切な命そのものであることには変わりねえ」

「……」

何を言っているんだ俺は、と正直心の中で思ってしまった。だけど、これが俺の本心なんだろうな。

不思議だ、過ぎた時間は本当に僅かではかないのに、なぜかこういう言葉が出てしまう。でも、嫌な気分はしていなかった。

「だから……その、自分の命優先で、な？」

「……」

無機質な表情なのは変わりなく、ただこちらをじつと見つめてくるだけだった。頷いてくれれば、文句はなかったのだが、まあ時間が時間だ、仕方のない事だろう。

ちやんと自分の心で「はい」と言ってくれるのを待つしかない。なんだろう、この過保護な感じは。

「じゃあ、行くか」

「……はい」

大きな鉄扉を身体全身で押すと、重苦しく鈍い音が空間を揺らすように響き渡る。段々と、その奥の光景が垣間見えてくる。

何も無い広大な空洞。床や壁はレンガ造りで造られ、壁にいたっては魔道蠟燭が淡い光を灯している。

——そしてその中心には、巨軀を持った人型の存在が一人、禍々しい殺気を放ちなが

ら、俺達のいる背後へ振り向いた。その表情には少し困惑が見られた。そりやそうだろう。

何せ下からやってきてるんだからな。

「……貴様、何処から来た……」

「まあ、下からつすね」

「下から……まさか、上層から落下してきたとでもいうのか。なら何故、再び地上を目ざす？」

「本意で落下したわけじゃねーつての。だから地上を目指して脱出を目指す。以上だ」

質問が多いモンスターだな、と心の中でため息をついておく。まあラスボス一歩手前のフロアボスと考えれば、これぐらい知能があっても不思議ではない。

ちなみに逆塔のラスボスというのは、一応存在しているらしいのだが、俺が降り立った298層には、下へ続く階段が見つからなかった為、出会った事は一度もない。最も、何か仕掛けとかで隠されていたのだろうけど、探す気すらなかったし、会ってみようという気もなかった。

どうせ出会ったら、即死だっただろうし。

「……で、通してくれるわけ？」

「……我ハは、ここの奥を守護する門番にすぎぬ」



「あ、じゃあ——」

「しかし、下から上がってきた貴様には、少し興味がある。そして、奥という意味に下も上も関係ない！」

高らかに宣言し、人型モンスターはその巨躯を起き上がらせ、こちら目掛けて一歩足を進める。ズシンという音と共に、身体が鳥肌立っていくのを感じる。

規格外だ、規格外すぎる。そんなモンスター、俺の知る限りでは存在していない筈だ。

「……っ、マスター」

「自分の命は優先しろよ」

といつても、それは自分も同じだし、攻撃力が皆無の俺は、ただ逃げる事しかできないだろう。

だがしかし、それが今の俺のやり方だ。生き延びる為なら、どんな手段だってとるしかない。

ビヤクヤの命に危険が迫った時は——まあ、何とかするしかない。こつちが囹をしてる間に、回復してもらうしか方法はない。

「む？ 貴様は戦わないのか？」

「……生憎と、戦う手段は俺には持ち合わせてねえ」

一歩下がる俺の姿を捉え、じっと睨みつける。何だ？ 卑怯とか言いたいのか、そ

りや卑怯だが、生き延びる為なら仕方ないだろう。

武器を持ってまともに扱う事ができないうえに、攻撃力が皆無な変身魔術師だぞ？  
どうすりやいいって言うんだよ。

「そうか。つまり、その者が私の相手ということか」

「ああ。俺の仲間だ。……杖だけだな」

「杖、だと？ 人の姿をしているが……。いや、変身魔術か」

「お、知ってるか、そりゃ話がはやい」

無能な天職の名を覚えているモンスターがいる事に、少し感動すら覚えてきた。巷では、変身魔術師なんてそこら辺の道化と変わらなにかいって、まともに覚えている人の方が珍しい位に知名度が下がっていた。悲しい事である。

まあ変身魔術師の人工の少なさも問題の一つなのかもしれない。実際、俺の周りで変身魔術師の天職を持つ人は一人もいないし、なんと知り合いも誰一人いない。変身魔術の修得も、専用の魔導書と独学で得た物にすぎない。

「変身魔術師か……既に廃れた物だと思っていたが。いや、それよりも、変身魔術師がここより下層で生き延びる事など……」

「まあ不思議だよな、俺だつて何度死んだと思った事か。……でも、頼もしい仲間が出来た事で、ここらまでこれた」

「ふむ……信頼しているのだな」

「それなりにな」

「……」

一瞬、ビヤクヤが笑ったような表情を見せた気がした。気のせいかな？ 気のせいだったとしても、ちよつと嬉しい気分になった。

「……じゃ、行くか！」

「はい、マスター」

「良いだろう——」。逆塔の守護者が一人、魔剣王ソルスがお相手致そう——ツ！」

## 07 魔剣王ソルス・中編

「ふっ——ッ！ はア！」

ザボルグ・ガイア

ディア・ギガルド

「獄炎ッ！ 神雷！」

（嘘だろっ……オイッ！）

ソルスとビヤクヤの激戦は想像を絶する物だった。正直この状況を説明するのは難しい程であった。

ソルスが開戦を宣言した刹那、ビヤクヤとソルスは瞬時に俺の視界から消え去った。瞬間、壁や床、天井が激しく爆せ崩れていく。

ソルスによる剣戟、ビヤクヤによる高位魔術、その2つによる激しいぶつかり合い。そこに、俺が介入する余地はなく、完全に二人の世界であった。

「よくやる——ッ！ 杖とはいえ、ここまでの魔術をッ！」

「……ッ」

「ビヤクヤッ、魔力消費はできるだけっ……うわっ！」

数多くの魔剣から閃光を放ち、ビヤクヤを圧倒する。崩れ落ちる瓦礫を足場にし、その攻撃を間一髪で避けつつ、魔術を放つ。

「炎弾——ッ！」  
ディアスタ

ビヤクヤも俺の魔力消費量に気づいたのか、消費が少なくかつ連射が可能な低級魔術に切り替える。

上位魔術は魔力を循環させるのに時間を要するため、威力は強いものの連射が出来ないという欠点を抱えている。その際にソルスは魔剣を振るい、ビヤクヤの動きを止めているのだろう。

さすがフロアボス級のモンスターだ、火力や耐久、そして判断力は今まで出会ったどのモンスターよりもトップクラスだ。

戦場の空間はもはや入室した時の面影を失い、見るも無残といった状況と化してしまっていた。

そんな中を杖という身であり、かつスキル「生命活動」を付与されたばかりであるにも関わらず、ソルスと拮抗しているあたり元から人間だったんじゃないかねえかと疑ってしまう。真正正銘の化け物だ。

「だが——まだ遅いぞっ！」

「ディア——あつ……」

ディアスタ

炎弾の詠唱を待つ事なく、ソルスはその巨軀を素早く動かし、ビヤクヤの眼前へと迫り、斬撃を振るう。

突然の事で一瞬思考が止まったのか、致命傷は避けたが、右足に刀身が掠る。元が杖だから血は出ないものの、斬れた彼女の皮膚は身体から離れると同時に木片へと変わっていく。

つまり——斬られて真つ二つに折れたならば、それは彼女の死を意味する。

「……炎玉<sup>ディア</sup>！」

「ぬっ！」

詠唱を無に等しい程まで減らし、低級魔術をソルスの首元へと放つ。低級の通り、ダメージは全くと言っていいほど通らないが、その爆風は空中に舞うソルスを地上へ吹き飛ばすには十分なほどであった。

トカロ・ボロス  
「嵐神！」

避ける暇を与えまいと、着地するまでのわずかな時間を詠唱にあて、風属性の上位魔術を迸らせる。

周囲に舞い落ちる瓦礫を巻き込み即興で威力を底上げし、ソルス目掛けて激突させる三段か。よくあの状況で思考が回る物だ。

——だが、俺はまだ何もやれていない。

「……ふっ、血が滾る——。聖劍<sup>エクスカリバー</sup>！」

「ッ。マスターも逃げてください！」

「分かってるっつーの!」

もう名称からしてヤバイ臭いしかしい。 エクスカリバー 聖剣……それは帝国史の遙か昔に名を刻む神代の兵器だ。伝承に疎い俺でも分かる程の知名度を誇る武具である。

なんでそんな物をコイツが持っているんだ、室内だぞ? そんな物をここでは鳴つたらどうなるか分かった物ではないってのに。

「クソツ!! 《変身：小石》!」

「魔空間!」 ユーストビエ

少しでも被害を抑える為に、身体を小石に変身させ、当たり判定を最小限に留める。対するビャクヤは俺の変身が間に合わないかと判断したのか、自身の防御を優先し眼前に障壁を展開する。こんな魔法まで使えるのか、つくづく便利な物だ。

程なくして、ソルスが剣を振るうと、俺達目掛けて黄金の閃光が放たれる。今までをはるかに超える衝撃音と爆風が、俺達の身体を掠め行く。

「——あぶねっ、あと少し上だったらやられてた。ビャクヤは——?」

「……っ」

真正面から受けきろうとしているため、俺以上の衝撃をもらっているだろう。さつきまで無機質だった表情に、微かな苦悶が見受けられた。

下の階層のモンスターを余裕で蹂躪していたビャクヤをここまで追い込んで、なん

つう化け物だよ、本当に。

何とか受けきり、程なくして閃光がピタリと止まる。刹那、ビヤクヤは目の前の障壁を解除し、少し膝をつく。ふう、ふう、と時々息を漏らしていた。

俺の魔力も限界だ、さっきの障壁の魔術、どんだけ魔力使う物だったんだよ——。これじゃあ、俺の魔力切れで全滅エンド待ったな。どうすれば……。

「……変身魔術師の方も倒す気でいたが、まさか小石に変身して微かな隙間を掻い潜るとは」

「へっ……ギリギリだったけどな。少し上ズレてたら本気で死んでたぜ？」

「うむ。杖の者も、聖剣を防ぐ程の障壁を放つとは」

「……」

警戒の色を解かず、いつでも魔術を放てるような体制を取っている。それを見て、ソラスはふつと笑う。

「良い信頼関係だ——杖を手にしてまだ少ししかたっていないものにも関わらずだ」

手に持っていた聖剣を消し、こちら目掛けてゆっくりと歩み寄る。その表情はどうか、面白い物を見ているように愉快的な物であった。

何か、何か企んでいる？



「何のつもりだ？」

「いや。モンスターという身だが、つい感動してしまつてな。武器とここまで共存できる冒険者など、今まで見た事がない——だから」

バツ。

ソルスはビヤクヤの前に手を向ける。

「貴様らの関係——そして、変身魔術師。貴様の真髓を、見せてもらおう。——スキルウエボン・ステイブル【**武器奪取**】」

「なっ!？」

「——ッ!? うあっ」

スキル名を高々に宣言した刹那、ビヤクヤの身体に紫電が走り、苦悶の表情を荒げさせる。

数分——彼女の身体は元の魔杖へと戻り、ソラスの腕の方へと誘導されていく。……嘘、だろ? 何もしていないのに変身が解除されたつてことは、所有権が無くなつたか壊れたかの二択でしかない。壊れた様子もない——つてことはつまり。

「ビヤクヤを……奪つた?」

「ふっ。この状態で、貴様は果たしてどう動くのか。楽しみだな」

ビヤクヤを奪われた俺は、散々言つた通り完全無力に等しい。攻撃力も無ければ、ま

ともな打開策も無い。

——絶望。そう形容せざるを得なかつた。

「さあ来い。地上へと戻らんとする道化師よ——ツ!!」